

204
91

立正安国論集註

全

前管長大僧正錦織日航師題歌
前大學林長權僧都小林日至師校閱
本山部長大學統清瀨日憲師序文
北眼比丘森川寬行集註

禁
賣
買

020192-000-6

特 1 8 — 4 2 8

立正安国論集註

森川 寬行 / 注

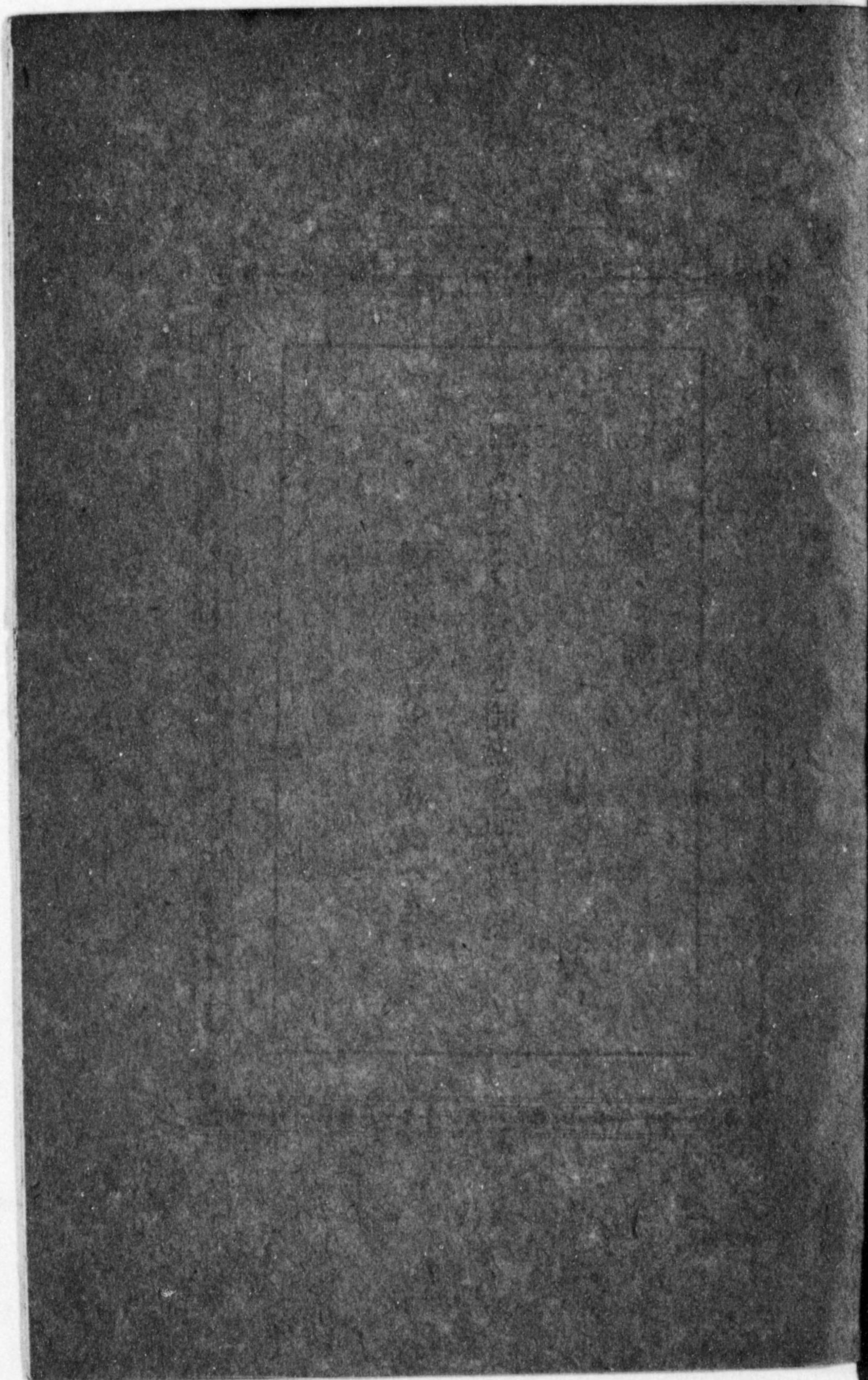
M30.10

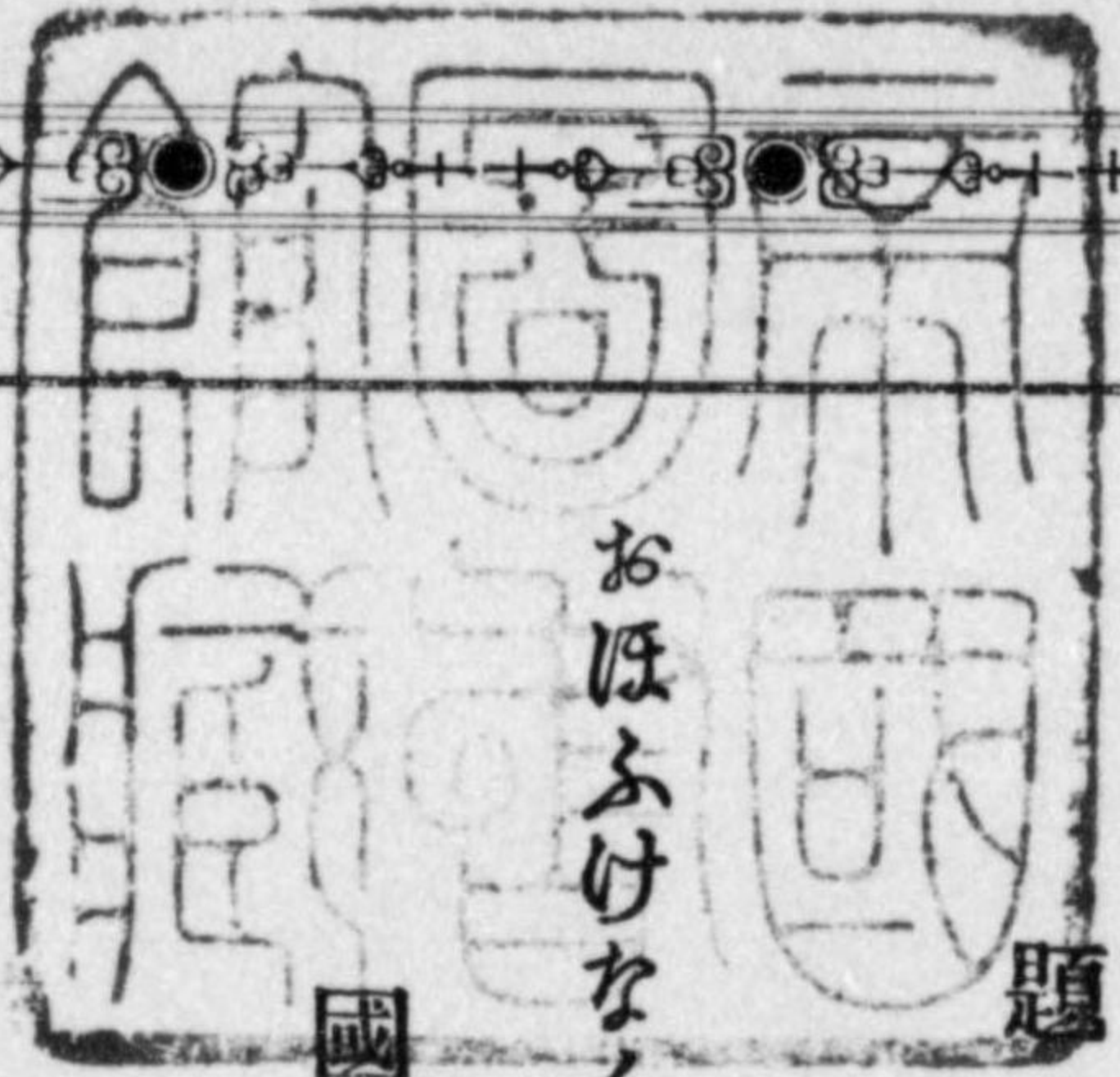
ABH-0407



特
4

204
91





題

詠

日

航

おほふけなきたつる御法の正しくは

國やすらけくなりぬへきかな



序

偉哉立正安國也、蓮祖夙揀天孽之原因、而論國
難之救護、其意切々焉、吾宗以本論之旨義、常爲
護國利民之規者、誠有以也、近頃吾友北眼君、講
暇註本論以贈焉、余一讀知其言簡其義明也矣、
若夫繙本書知其意者、蓋益世不尠也、余應請以
爲之序、

明治三十年春日識于東京慶印寺南窓下

三勿 清瀨日憲

自序

格言問題之起也、經王獅子猛然大吼、權門之蠱
輩、肝膽畏縮、悄然無氣息焉、豈不快事哉、統一團
之出世也、翕然志士相會、意氣相投矣、余班統一
團員、爾來鳴法鼓於東、振利劍於西者屢焉、而未
能無隔履搔痒之憾也、故一日與熱誠之信徒胥
謀、說以施本傳道之功德與蓮祖、一世之芳躅焉、
信徒感奮議立定矣、於茲乎、余僅參酌古哲之說
蒼皇註本論廣頒信徒、雖然余稟性疎慵、或過易
或失難者不少、且近頃塵事鞅掌、固不保無誤脫
也、若夫四方之信徒依本註以知大意者、余之所

爲足也、唯夫博雅之士、幸指摘秕謬有是正之所、豈翹余幸榮耳哉、

明治三十年二月宗祖誕應日

集註者識

立正安國論御勸由來

本文は安國論奏呈の後九箇年を経て、安國論に勸し玉ふ如く、果して他國倭
逼難の前兆顯はれ朝野騷擾す、茲に於て宗祖本文を鎌倉管領平金吾頼綱の父
法監に送り、其の符合を論じ玉ふ、然るに本文は安國論造作の由來尤も顯明
にして、恰も宗祖御自身に安國論に序し玉ふ如し、故に此に編し以て讀者の
便に供す、



正嘉元年(太歲丁巳)八月二十三日戌亥時超於先代大地

震東鑑に云く、戌の尅大地震音有り、神社佛閣一字として全きことなし、同二
年(戊午)八月一日大風東鑑に云く、暴風烈く吹き甚雨渡るが如し、同

三年(己未)大飢饉正元元年(己未)大疫病歴代皇記に云く、是歲春
より夏に及び疫疾餓殍道

に盈同二年(庚申)四季大疫不已萬民超大半死了而間
國主驚之仰付内外典學者有種々御祈禱雖爾無一分驗

還增長飢疫等日蓮見世間躰粗勸一切經佛一代五十年の教法を一切經と云ふ

御祈禱無驗還增長凶惡之由道理文證得之了終無止造

作勸文一通其名號立正安國論文應元年庚申七月十六

日辰時付屋戸野入道宿屋左衛門尉光則奉進古最明寺入道殿了

最明寺時頼此文に先たつ既に六年則ち弘長三年十一月卒す故に古と云ふ此偏爲報國土恩也其勸文

意立正安國論日本國天神七代地神五代百王百代始至

人王第三十代欽明天皇御宇自百濟國佛法渡此國欽明帝の

十三年冬十月百濟國聖明王始て佛像及び經論等を獻じ且つ上表して曰く是法諸法の中に於て最も殊勝となす周公孔子尙知る能はず能く無量福徳を生じ無上菩提を成辨す至于桓武天皇御宇其中間五十餘代二百六十餘

年之其間一切經并六宗三論宗成實宗俱舍宗法相宗華嚴宗律宗是れを南都六宗と云ふ雖有

之天台本邦天台宗の開基は傳教大師なり真言本邦真言宗の開基は弘法なり二宗未有之桓武

御宇山階寺行表僧正御弟子有最澄小僧後號傳教大師

已前所渡六宗並禪宗榮西始めて本邦に禪宗を傳ふ雖極之未叶我意聖武

天皇御宇大唐鑒眞和尚所渡天台章疏天台大師は支那隋朝の入り嘗て玄義文句止觀の三部を講説し以て一宗の綱格を示す茲に章疏と云は即ち天台の三大部也經四十餘年已後始最

澄披見之粗覺佛立旨了最澄爲天長地久延曆四年建立

叡山比叡山延曆寺桓武皇帝崇之號天子本命道場捨六宗御歸

依一向歸伏天台圓宗同延曆十三年遷長岡京建立平安

城桓武帝遷都の詔に曰く今此の山背は山河襟帶自然に城を作す宜しく山背を改めて山城國と爲すべし子來之民謳歌の聲異口同辭號して平安の京と云ふ今宜しく之れに從ふべし同延曆二十一年正月十九日於高雄寺召合南

三

都七大寺六宗、碩學勤操玄耀等十四人、善議、勝猷、奉基、龍忍、

慈誥、玄耀、歲先、道證、光證、觀敏、の十四人也、決斷勝負、六宗明匠不及、一問答閉口

如鼻、華嚴宗、五教、華嚴宗には聖教一代を判じ五教となす、所謂る一者小乘

法相宗、三時、法相宗には一切經を判じ、三時を立つ、則ち初時に有、三論宗

二教、三論宗には一代を判じ二教を立、等所立破了、但非破自宗、皆知

爲謗法者、同二十九日皇帝下敕宣結之、詔に曰く、昔日給孤須達

法を求め、常啼は般若を尋香の城に聞く、是を以て和氣朝臣二六の龍象を屈つし、

一乗の法筵を設けて天台法華玄義等を演暢す、所以る惠日光を増し、禪河流と澄ま

し、一乗の玄猷始て域内に開き、三學の軌範遂に人天に被、十四人作謝表

奉捧皇帝、其表に曰く、沙門善議等言さく、今月二十九日治部大夫正五位和氣

乘の釋侶に隨喜し祇た慈誥を奉し喜懼交懷す、凡る緇徒に在るもの慶戴に勝へず、

善議等聞す、如來西に現し衆生の機に隨つて教を演べ、聖法東漸して、緣感の時に

依りて流化す、是を以て始て華嚴の説を演じ頓に菩薩の衆を度し、次に阿舍の教を

開きて漸く聲聞の徒を濟し、復た般若の理を啓して以て人法の空を示めす、後に法

華の妙を弘めて權實の趣を分別し、遂に三乗の輩を總て共に一圓の車に載す、若乃

漢明の年、教震旦に被り、磯島の代訓本朝に及ぶ也、聖德皇子は靈山の聽衆衡岳の

後身、經を西隣に請ひ道を東域に弘む、智者禪師は亦た共に靈山に侍し、迹を台岳

に降し同く法華三昧を語り、以て諸佛の妙旨を演ぶ者也、竊に天台玄疏を見るに、

釋迦一代の教を總括して、悉く其趣と顯はし通せざる所なし、獨り諸宗に逾へ殊に

一道を示す、其中の所説甚深妙理にして七箇の大寺六宗の學生皆な未だ聞かざる所

曾て未だ見ざるところ、三論法相久年の諍ひ渙焉として冰釋し照然として既に明な

り、猶雲霧と披て三光を見るか如し矣、聖德弘化より以降今に二百餘年の間講ずる

所の經論其數多し矣、彼此理を争ひ其疑未だもけず此最妙圓宗猶未だ闡揚せず、蓋

し此間群生未だ圓味に應せざるを以て歎、伏て惟るに聖朝久しく如來の付囑を受け、

深く純圓の機を結び、一妙の義理始めて乃ち興顯す、六宗の學衆初めて至極を悟る、

謂つべし此界の含靈而今而後悉く妙圓の船に載せ早く彼岸に濟すを得ん、譬へば猶

は如來成道四十年の後乃ち法華を説き、悉く三乗の侶をして共に一實の車に駕せし

皇帝、叡山御歸依超孝子事、父母勝黎民恐王威或御時捧

宣明或御時以非處理等云云殊清和天皇依叡山惠亮和
尚法威即位帝王外祖父九條右丞相藤原良房誓狀捧叡山右
將軍源賴朝清和末葉也鎌倉御成敗不論是非違背叡山
天命有恐者歟然後鳥羽院御宇建仁年中法然大日云二
人增長慢者惡鬼入其身誑惑國中上下舉世成念佛者每
入趣禪宗存外山門御歸依淺薄國中法華真言學者被棄
置了故叡山守護天照太神正八幡宮山王七社國中守護
諸天善神不貪法味失威光捨國土去了惡鬼得便至災難
結句自他國可破此國先相所勸也又其後文永元年甲子
七月五日彗星出東方餘光大躰及一國此又世始已來所

無凶瑞也內外典學者不知其凶瑞根源予彌增長悲嘆而
捧勸文已後經九箇年今年後正月見大蒙古國國書此の國書與書
に注す相叶日蓮勸文宛如符契佛記云我滅度後經一百年
阿育大王出世弘我舍利舍利とは梵語にて爰には身骨と譯す故に佛法と見て可なり周昭王御
字大史蘇由記曰一千年外世教佛敎渡此土聖德太子記
云我滅度後二百年山城國可立平安城天台大師記云我
滅度後二百餘年已後生東國弘我正法等云云皆如記文
以上聖人未萌を知るの例を示し以下安國論の符合を説く日蓮見正嘉大地震同大風飢饉
正元元年大疫等記云自他國可破此國先相也似自讚
若毀壞此國土復佛法破滅無疑者也而當世高僧等與謗

法者同意者也。復不知自宗立底者也。定敕宣御教書天子の命是を命是を教書と云ふ、祈請此凶惡歟。彌作瞋破壞國土事無疑者也。日蓮復對治之方知之。除叡山日本國。但日蓮一人也。譬如日月無二。聖人並肩故。若此事妄言日蓮所持法華經守護十羅刹治罰蒙之。但偏爲國爲法爲人爲身申之。復禪門遂對面不用之。定可有後悔恐謹言。

文永五年(太歲戊辰)四月五日

日蓮 在判

法鑒御房

立正安國論集註

北眼 詠川 寬行 集註

本論奏呈の理由は、正嘉年間より天災地妖交々至り、疾疫諸國に行はれ、餓殍道路に充ち、戦々競々として民皆安すからず、茲に於て宗祖大に國家を憂ひ玉ひ、其災の由て來る所以と經典に求め、民を塗炭に救はんと欲し、駿洲富士郡岩本實相寺に詣り、深く一切經を探り玉ふに、國家の興亡存廢は、全く所信教法の正邪に基因すとの佛示は、金光明經、大集經、仁王經、藥師經の現文に存せり、故に文應元年寶曆三十九歳の時、松葉谷の窟中に於て本論を草し、以て廟堂に呈し大に天下を諫め玉ふ、時に龜山帝王位を占められ、宗尊親王鎌倉將軍として霸政を總へ、長時執權の職を帶ふ、然れども當時國家の政柄は、皆悉く最明寺入道時頼の手中に存せり、故に宗祖本論を其家臣宿屋入道光則に托し、以て時頼に呈し、先づ社稷の安寧を祈らんと欲せば、宜く國內の謗法を禁斷し、正法を信すべきを論ず、然るに良薬口に苦く、諫言耳に逆ひ、爾後時頼の心益々平ならず、遂に弘長元年宗祖を伊豆に謫せしも、宗祖の勇猛日に倍し、盛んに四箇格言を喝道し、諸宗の人法を折伏し、法華本門の妙法を顯揚し給ふ、

旅客來嘆曰本論は實主問答辭にして、全論中九箇の問答を設け、巧に國家存亡の樞機を説き、明に教法正邪の別を示し、以て客の一誓約に終

る、蓋し第一問は災難の由て來る所以を質す、自近年至近日天變地夭飢饉疫癘正嘉元年

の大地震、同二年の大風、遍滿天下廣迸地上牛馬斃巷骸骨充

路招死之輩既超大半不悲之族敢無一人邪教旺盛の弊、此に至る乎、然間

或專利劍即是之文善導般舟讚に云く、門々不同にしては萬四なり、無明と果と業因を滅せんが爲め、利劍は即是れ彌陀の號なり、一聲稱念すれば罪皆除く唱西土教主之名西方十萬億安養淨土の教主、十或恃

衆病悉除之願本願藥師經に曰く、第七大願、願くは我れ來生菩提を得る時、若し諸の有情衆病ひ逼切にして、救無く歸無く醫無く藥無く

家無く貧窮多苦のとき、我が名號一たび其耳東方淨瑠瑠に經れば、衆病悉く除き、身心安樂ならむ誦東方如來之經瑠瑠世界の

教主藥師如來の經、或仰病即消滅不老不死之詞崇法華眞實

即ち本願藥師經也、或仰病即消滅不老不死之詞崇法華眞實

之妙文天台宗は法華經に依り病即消滅不老不死の文を讀誦す、或信七難即滅七福即生之

句調百座百講之儀仁王經吉藏疏に曰く、七難即滅七福即生萬姓安樂帝王頂生王天上して其國を滅さんと欲す、時に帝釋天王七佛の法用の如く百高座を敷き百法師を請して、般若を講説するに頂生王即ち退く當代仁王經の如く朝廷に於て

法會を行ふ、有因秘密眞言之教灑五瓶之水眞言宗は大日經金剛頂經蘇悉地經を所依の經典となし、祈禱には壇上に五瓶を置き、各五寶五穀五藥五香を入れ梅枝を以て之れに注ぎ、加持して以て除災の術となす、有全坐禪入定

之儀澄空觀之月禪宗に於て坐禪觀法を重んじ、萬法即空即心是佛を悟らんとす、若書七鬼神

號而押千門却温神呪經に七鬼を説く、即ち一に夢多難鬼、二に阿伽尼鬼、三に尼伽尸鬼、四に阿伽那鬼、五波羅尼鬼、六に阿毘羅鬼、七に婆

提利鬼是若圖五大力之形懸萬戶舊譯仁王經受持品に五大力を説く、一に金剛吼菩薩、二に龍王吼菩薩、三に無畏十力菩薩、四に雷電

吼菩薩、五に無量力菩薩、若拜天神地祇而企四角四堺之祭

祀若哀萬民百姓而行國主國宰之德政雖然唯摧肝膽彌

逼飢疫乞客盜目死人滿眼臥屍爲觀並尸作橋國民の慘狀以て見るべし、

觀夫二離日月合璧五緯木火土金水の五星を云ふ連珠三寶佛寶、法寶、僧寶

在世百王未窮此世早衰其法何廢是依何禍由何誤矣日月

星辰の運行未だ其度を失はず、三寶盛んにして帝業無窮なり、然るに何ぞ國民苦しみ祈念の効驗顯はれざる乎と

主人曰國神謗法の國を厭ひて去り、惡鬼間に乘じて國家を乱す所以を述べ獨愁此事憤悲胸臆客

來共嘆屢致談話夫出家而入道者佛道也依法而期佛也而

今神術不協佛威無驗具觀當世之體愚發後生之疑當代皆な悉く頑迷にして、災害の原因を知らず、徒に祈禱を行ふと雖も現世に其驗なきを以て、後世期佛の疑を起す、然則仰圓覆天地

曰吞恨俯方載地也而深慮情傾微管聊披經文世皆背正

人悉歸惡國家災害の根源是れに基き、終に祈禱の驗なきに至る故善神捨國而相去聖人

辭所而不還是以魔來災起難起不可不言不可不恐宗祖身命を惜

まず、國民を救はんことを欲すの悲願茲に顯る、

客曰妖災起因の證據を求む天下之災國中之難余非獨嘆衆皆悲今入

蘭室初承芳詞神聖去辭災難並起出何經哉聞其證據矣

主人曰四經を引證し、災害の原因を明示す其文繁多其證弘博金光明經云

於其國土雖有此經此經とは一應引用の本經を指す、然りと雖も更に之を論窮せば法華經を指す、以下之に例せよ

未嘗流布生捨離心不樂聽聞亦不供養尊重讚歎見四部

衆四部衆とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷にして、即ち僧尼俗男及び俗女なり持經之人亦復不能尊重

乃至供養遂令我等及餘眷屬無量諸天不得聞此甚深妙

法背甘露味失正法流無有威光及以勢力甘露の妙法既に去る、四天並に諸天正法の

流布に値遇するを得ず、故に諸神威勢と失し、衆生を益する無きに至る、增長惡趣人多く地獄餓鬼畜生修羅の四惡趣に墮つ損

滅人天墜生死河乖涅槃路生死の大海に漂没し、不生不滅の佛果に至るを得ず、世尊我等

四王世尊とは釋迦如來、四王とは持國、毘沙門、廣目、增長の四天王なり、並諸眷屬及藥叉一に夜叉と曰ふ、能く

空中を飛騰する者、等見如斯事捨其國土無擁護心非但我等捨棄

是王亦有無量守護國土諸天善神皆悉捨去既捨離已其

國當有種々災過喪失國位一切人衆皆無善心唯有繫縛

殺害瞋諍互相讒譎枉及無辜疫病流行彗星數出兩日並

現宗祖在世の文永五年五月八日兩日出て、同六年二月十一日三日月並出す、支那に於ては、晋書五に建興五年正月庚子虹蜺天下彌り三日並照すと、薄

蝕無恒黑白二虹表不祥相星流地動井内發聲暴雨惡風

不依時節常遭飢饉苗實不成多有他方怨賊侵掠國內入

民受諸苦惱土地無有可樂之處已上大集經云大集月藏經法滅盡品

佛法實隱沒鬚髮爪皆長是れ野蠻の風俗、諸法亦忘失當時虛空

中大聲震於地一切皆遍動猶如水上輪城墻破落下屋宇

悉圯圻樹林根枝葉華葉果藥盡唯除淨居天天道に二十八天有り、所謂る欲

界の六天、色界の十八天、無色界の四天甘、辛、酸、苦、鹹、澁、淡、欲界一切處七味煩悩を解脱す

三精氣地味精氣、衆生味精氣、法醍醐味精氣、損滅無有餘解脫諸善論べき善論

當時一切盡所生華菓味希少亦不美諸有井泉池一切盡

枯涸土地悉鹹鹵敵裂成丘澗諸山皆燦然天龍不降雨苗

稼皆枯死生者皆死盡餘草更不生雨土皆昏闇日月不現

明四方皆亢旱數現諸惡瑞十不善とは、殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、兩舌、

惡口、貪、瞋、癡別して三毒熾盛を示す、貪瞋癡盛を示す、倍增衆生於父母觀之如獐

鹿倫理壞乱して、子父母に孝ならざるに譬ふ 衆生及壽命色力威樂滅遠離人天樂
 皆悉墮惡道。如是不善業惡王惡比丘毀壞我正法。損滅天人道。諸天善神王悲愍衆生者。棄此濁惡國皆悉向餘方。已上。仁王經云。品。護國 國土乱時先鬼神乱。鬼神乱故萬民乱。賊來劫國百姓亡喪。臣君太子王子百官共生是非。天地恠異。二十八宿二十八宿とは東東にて七宿あり、角、亢、底、房、心、尾、箕、西方あり、斗、牛、女、虛、危、室、壁、星道日月失時失度多有賊起 亦云。我今五眼肉眼、天眼、惠眼、法眼、佛眼 明見三世過去、現在、未來 一切國主皆由過去世侍五百佛。得爲帝王主。是爲一切聖人羅漢小乗教の漢佛なり 而爲來生彼國土中作大利益。若王福盡時一切

聖人皆爲捨去。若一切聖人去時七難必起。已上。七難とは鬼神難、賊難、君臣太子百官難、二十八宿難、火難、水難、風難なり 藥師經云。下。若刹帝利灌頂王等。刹帝利灌頂王とは皇帝を云ふ、古代印度に四種の階級族姓有り、所謂る王族は刹帝利、宗教者は婆羅門、商賈は毘舍、農人は首陀是れなり、灌頂王の義は、善珠鈔に大國の太子初め位に登る時、小國の王四海の水を取て其頂に灌く、故に名を得るなりと。災難起時所謂人衆疾疫難。他國侵逼難。自界叛逆難。星宿變恠難。日月薄蝕難。非時風雨難。過時不雨難。已上。仁王經云。品。護國 大王吾今所化百億須彌百億日月。一一須彌有四天下。東弗婆提、西瞿耶尼、南閻浮提、北鬱草越、是れを須彌四洲と云ふ 其南閻浮提有十六大國五百中國十千小國無量粟散國嶋嶼。其國土中有七可畏難。一切國王爲是難。故云何爲難。日月失度。時節返逆。或赤日出。黑日出。二三四五日

出。或日蝕無光。或日輪一重二三四五重輪現爲一難也。是

的天變は飢餓刀兵
疾疫の祥なり

二十八宿失度。金星。彗星。輪星。鬼星。火星。水

星。風星。刀星。南斗。北斗。五鎮大星。歲星、熒惑星、太白星、辰星、中央
鎮星を輔す故に合して五鎮となす

一切國主星。三公星。百官星。如是諸星各各變現爲二難也。

大火燒國。萬姓燒盡。或鬼火。龍火。天火。山神火。人火。樹木火。

賊火。吉藏疏に鬼火とは鬼衆生に瞋れば惡火夜起を爲す、亦人をして熱病せしむ、
龍火とは龍瞋れば毒火を雨す人をして癰腫せしむ即報得神通火なり、天火と

は、霹靂火なり天に就て名となすなり、神火とは變現なり、神に二有り一には仙人
瞋れば火瞋より生ず、二に仙人咒を誦すれば鬼神をして百姓の家を燒かしむ、人火

とは人に約して名を得、樹木火とは知るべし、如是變恠爲三難也。大水

漂沒。百姓時節返逆。冬雨雪。冬時雷電霹靂。六月雨。冰霜

雹。雨。赤水。黑水。青水。雨。土山。石山。雨。沙礫石。江河逆流。浮山

流石。如是變時爲四難也。大風吹殺萬姓。國土山河樹木一

時滅沒。非時。大風。黑風。赤風。青風。天風。地風。火風。水風。如是

變爲五難也。天地國土亢陽。炎火洞然。百草亢旱。五穀不登。

土地赫燃。萬姓滅盡。如是變時爲六難也。四方賊來侵國。內

外。賊起。火賊。水賊。風賊。鬼賊。百姓荒亂。刀兵劫起。如是怪時

爲七難也。大集經云。二十若有國王於無量世。修施戒慧。施布

持戒、見我法滅。捨不擁護。如是所種無量善根。悉皆滅失。其

國當有三不祥事。一者穀貴。二者兵革。三者疫病。一切善神

悉捨離之。其王教令人不隨從。常爲隣國之所侵燒。暴火橫

起。多惡風雨。暴水增長。吹漂人民。內外親戚。其共謀叛。其王

不久當遇重病壽終之後生大地獄中乃至如王夫人太子

大臣城主村主將帥郡守宰官亦復如是已上夫四經文朗

金光明經大集經仁王經藥師經的四經に由り國家の妖災社稷隆汚の起因尤も顯明也萬人誰疑而盲瞽之輩

迷惑之人妄信邪說不辨正教國民たる者宜しく反省すべき處故天下世上

於諸佛衆經生捨離之心無擁護之志仍善神聖人捨國去

所是以惡鬼外道成災致難矣本論に於て法華以前即ち爾前經を引き法華流布せざる時は國家紊亂の基ひた

るを證す是少しく怪訝の念なきに非ず故に略して其所以を述べて其疑を解かんと觀心本尊得意抄に曰く一代の聖教を大に分て二となす一に大綱二に綱目也

初め大綱とは成佛得達の教也成佛得達は唯だ法華也爾前經に於て成佛得道の文言之を説くと雖も但た名字のみ有て其實義法華に有り故に傳教大師決權實論に

云く權智所作唯だ名字のみ有て實義有る無し云々但し權教に於て成佛得道の外の説相虚しかるべからず法華の綱目たる故也所詮成佛得道の綱目法華に之を説

き其餘の綱目衆典に之れを明す法華の綱目たる故に法華の證文に是れ引用すべき也云々

客作色曰客未だ教の邪正を辨せず權實を知らず後漢明帝者悟金人

夢得白馬之教佛敎印度より初めて支那に傳來せしを云ふ也金湯編に云く明帝諱は莊光武の第四子帝或時南宮に寢し金人を夢む長

け丈六頂に日光を佩ひ胸に卅字を題し殿庭を飛行す去來碍り無し且つ群臣に問ふ時に大傳毅進んで曰く臣聞く西域に神あり其名を佛と曰ふ陛下夢むところ將に必

ず是ならん乎帝以て然りとなし即ち定遠將軍蔡愔中郎將秦景博士王遵等十八人の使を西域に遣はし佛道を訪求す天竺の隣境月支國に於て摩騰竺法蘭に遇ひ佛の

倚像並梵本經六十萬言を得載するに白馬を以てし相與に東に還る八年乙丑蔡愔等洛陽に達す摩騰闕に入り經像を獻す帝大に悦び鴻臚寺に館せしむ法蘭間行し

て而して後に至る十年丁卯敎して洛陽城西に於て白馬寺を立て以上宮太子

德太子と云ふ白馬經を駄するを以て遂に白馬寺と名づく也上宮太子

徳太子と云ふ白馬經を駄するを以て遂に白馬寺と名づく也上宮太子

徳太子と云ふ白馬經を駄するを以て遂に白馬寺と名づく也上宮太子

徳太子と云ふ白馬經を駄するを以て遂に白馬寺と名づく也上宮太子

爾來上自一人下至萬民崇佛像專經

して茲に表示し玉ふ乎故に別

崇峻帝丁未八月馬子諸皇

子と謀り守屋を濫川の

第に圍む守屋稻城を築て之を拒く時に麻戸皇子髪を束ねて軍後に隨ひ四天王の

像を作り頂に置き曰く敵に勝たば則必ず護世四王と奉せんと馬子亦た誓て曰く

敵に勝つの後必ず三寶を興隆せんと既に戦ひ勝ち赤擣守屋を射殺せり蓋し日本

卷然則叡山南都 南都元明帝より光仁帝に至る、七代都する佛法の一都會にして東大寺興福寺等の大寺有り、 園城

東寺 園城寺は江湖の西に在り、天武の朝大友與多丸の建る所、後ち清和帝詔して當寺を以て傳法灌頂の道場となし智證に賜ふ、東寺は古の鴻臚館にして嵯峨

帝之を弘法に賜ひ眞言院となす、 四海一州五畿七道佛經星羅堂宇雲布鶯

子 佛十大弟子中、舍利弗の異稱、 之族則觀鷲頭山 靈鷲 之月鶴勒 鶴勒那とて佛後之高僧なり、 之

流亦傳鷄足 佛弟子加葉入定の山、 之風誰謂編一代之教廢三寶之跡

哉 佛像經卷山の如く、殿堂巍々として雲に聳へ、舍利弗鶴勒那迦葉の如き高僧佛法と弘通しをれり、然るに何ぞ佛教壞亂と云ふ乎、 若有其

證委聞其故矣

主人喻曰 三經を擧げ來り、誹謗正法の輩と示めす、 佛閣連囊經藏並軒僧如竹葦

侶者似稻麻崇重年舊尊貴日新但法師諂曲而迷惑人倫

王臣不覺而無辨邪正 古今同轍嘆く、 仁王經云 囑累 諸惡比

丘多求名利於國王太子王子前自說破佛法因緣破國因

緣其王不別 邪正を辨せざるなり、 信聽此語橫作法制不依佛戒是爲

破佛破國因緣已上涅槃經云 南本第 菩薩於惡象等心無

恐怖於惡知識生怖畏心爲惡象殺不至三趣 地獄、餓鬼、畜生の三惡趣、

爲惡友殺必至三趣已上法華經云 勸持 惡世中比丘邪智

心諂曲未得謂爲得我慢心充滿或有阿練若 梵語爰には遠離處、亦た閑靜處

と譯す、 納衣 納とは衲なり故に法衣の僧と云ふ、 在空閑自謂行眞道輕賤人間者

貪著利養故與白衣 俗人 說法爲世所恭敬如六通羅漢

六通とは天眼通、天耳通、他心通、神境通、宿命通、漏盡通也、 乃至常在大衆中欲毀我等故向

國王大臣婆羅門居士及餘比丘衆誹謗說我惡謂是邪見

人説外道論議濁劫惡世中多有諸恐怖惡鬼入其身罵詈
毀辱我濁世惡比丘不知佛方便隨宜所說法惡口而頻蹙
數々見擯出(已上)

法華以外の經典は皆悉く佛の隨宜方便説にして、決して現安後善を望むべからず、然るに濁世末法の妖僧輩猥りに口を佛典に借り、恣に佛敎に違し、權敎に執し、人を欺き法を破し、敢て正法弘通を碍げ強て衆生を惡道に導く、其罪實に恐るべく又た惡むべし、

涅槃經云會疏、我涅槃後無量百歲四道聖人四道聖人とは、須陀洹、斯陀含、

阿那含、阿羅漢の四種の聖位なり、此の四道は小乗敎の聖位たりと雖も、本經の義は但に小乗の人を指すに非ず、釋尊滅後出世の高僧を付法藏經に説く、今は此の付法藏の聖人悉復涅槃正法滅後於像法中佛滅後一千年間を正法と云ふ、

し、次の萬年を末法とす、今時は即ち末法なり、當有比丘似像持律少讀誦經貪嗜飲

食長養其身雖着袈裟猶獵師細視徐行如猫伺鼠常唱是言我得羅漢外現賢善內懷貪嫉如受啞法婆羅門等輔行五に

彼の外道中啞法を計する有り、言語を共にせず、以て至道と爲すと曰へり、蓋し禪宗には敎外別傳不立文字指直人心見性成佛と云ふ、何ぞ此の外道に類する甚だしき哉、實非沙門現沙門像邪見熾盛誹謗正法(已上)像法既に然り況ん

や末法に於てをや、就文見世誠以然矣不誠惡侶者豈成善事哉

客猶憤曰誹法の人を詰問す、明王因天地而成化聖人察理非而治

世世上之僧侶者天下之所歸也於惡侶者明王不可信非聖人者賢哲不可仰今以賢聖之尊重則知龍象不輕何吐妄言強成誹謗以誰人謂惡比丘哉委細欲聞矣

主人曰法然の選擇集に依りて、闍國誹法の人となることを述ぶ、蓋し本論は通じて諸宗の非義を擧げ之を責むと雖も、別して所破は淨土門に有り、所謂る彌陀の稱名を以て現安後善の眞法をとし、餘經を以て佛因に非すと爲し、剩へ法華經を以て其中に加ふ、是れ實に破國破佛の暴義たり、故に宗祖別して念佛門家の非理を擧げ玉ふ、後鳥羽院御宇有法然元亨釋書に曰く、法然初め天台を學び、晩に信師の往生要集を見て

乃ち所業を棄て、淨土專念の宗と倡ふ、承安四年黒谷を出て洛東吉水に居り、盛んに專修及び圓頓菩薩大戒を説く、緇白靡然として風に向ふ、高倉帝召し宮に入れ受戒す、藤相國兼實延て淨土の事を問ふ、空選擇集 作選擇集矣。具には撰擇を述し之を呈す、專修の徒取て秘要となす」

と云ふ、此の書誹謗正法の根元、則破一代之聖教。遍迷十方之衆念佛無間論と出す所以なり

生。其選擇云。以下選擇集の文を抜載し、以て法然道綽禪師立聖道

淨土二門而捨聖道正歸淨土之文。道綽は支那淨土家の祖にして、本と涅槃經の、涅槃經を講ず

ること二十四遍に至る、嘗て石壁の女忠寺に詣し、曇鸞の碑文を見て感有り、終に淨土專念と唱へ安樂集を作る、其集に於て佛教を聖道淨土の二門に分類し、淨土三部經を以て淨土門とし之を用ひ、其他諸經と聖道門となし之を棄つ、安樂集に云く、一に謂く聖道、二に謂く往生淨土、其の聖道の一稱今時證し難し、一に大聖を去る

遙遠なるに由る、二に理深解微に依る」 初聖道門者、初聖以下は法然安樂集の文意 就之有

二乃至。宗祖乃至を以て以下の文を略す、……一には大乘、二には小乘、大唯だ顯大及び權大を存す故に歷劫迂廻 准之思之應存密大及び以實

の行に當る」……以下本文に續く、

大。甚哉法然の妄、准之思之の四字を用ひて、終に牽強附會して、密大及び實大を聖道門に入れ難行道と爲す、是れ一には道綽の意と曲解し、二には佛の本懷

經を誘る、其罪實に深し、故に宗祖之を嘆じ、日本國の謗法は准之思之の四字より起ると」讀者克く熟考窮盡せよ、然則今眞言佛

心。禪宗一名佛心 天台華嚴三論法相地論攝論此等之意正

在此也。法然諸大乘の各宗を列擧し、悉く曇鸞法師往生論注云、竺

の世親往生淨土論を著し、後謹案龍樹菩薩十住毘婆沙云菩薩

求阿毘跋致。梵語跋致は不退轉と譯す、有二種道。一者難行道二

者易行道。曇鸞は支那淨土家の祖にして、初め仙術を學び、後三藏菩提流支

終に往生論注を造る、其書に於て難易二道を解して曰く、難行道とは乃ち多途有り、粗は五三と言ひ以て義意を示さん、一者外道の相善く菩薩の法を乱る、二者聲聞の

自利大慈悲を障る、二者無願の惡人他の勝徳を破る、四者顛倒の善果能く梵行を壞す、五者唯だ是れ自力他力の持なし、乃至易行道とは、謂く但だ信佛の因縁を以て、淨

土に生せんと願すれば、佛の願力に乗じて、此中難行道者即是聖道

門也。易行道者。即是淨土門也。淨土宗學者。先須知此旨。設

雖先學聖道門。入若於淨土門。有其志者。須棄聖道。歸於淨

土。此中以下は、法然往生論の意を私通せしなり。抑も龍樹菩薩の十住毘婆娑論

は、華嚴經十地品を解し、難易を論じたる者にして、敢て法華を論せず、尙曇

鸞と雖も、未だ確乎として實大乘修行を難行道に攝せず、然るに法然、龍樹及び曇鸞

の難易の語を借り來り、曲て實大乘を難雜等に入る、嗚呼法然も佛敵なる乎、

又云。善導和尚立正雜二行捨雜行歸正行之文。善導も支那淨

土家の祖なり、導嘗て大藏に投じ、手に信せて經を探り、觀無量壽經を得たり、便ち喜んで誦習す、

偶々道綽に謁し、益々專修念佛を信じ、終に觀經疏並に往生禮讚等を造る、其觀經

疏の四に正雜二行を解して曰く、行に二種有り、一者正行、二者雜行、正行と言ふ

は専ら往生經に依て行じ行する者、是を正行と名づく、何者か是なる、一心に専ら

此の觀經、彌陀經、無量壽經等を讀誦し、一心に專注して、彼の國の二報莊嚴を思

想し觀察し憶念す、若し禮するには、一心に専ら彼の佛を禮し、若し口に稱するには、

即一心に専ら彼の佛と稱へ、若し讚歎供養するには、即ち一心に専ら讚歎供養す、

是を名けて正となす、又た此の正中に就て復た二種有り、一者一心に専ら彌陀の名

號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々捨てざる者を是を正定の業と名

づく、彼の佛に順するが故に、若し禮誦等に依るをば、即ち名づけて助業と爲す、

此の正助二行を除きて、己外の自 第一讀誦雜行者。第一以下は、法然觀

餘の諸書を悉く雜行と名づく、經疏に正雜二行の別

有るを見て、正雜に各五種を立て、此を細釋し、以て私見を逞くせし文也、蓋し疏

の、自餘の諸善は悉く雜行と名づくの文に於て、自餘の諸善の言、泛爾として法華

等を加ふるか否や、遽に極論し難し、然るに法然此等の文 除上觀經等往

生淨土經、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の 已外於大小乘顯密

諸經受持讀誦悉名讀誦雜行者。第三禮拜雜行者。法然雜行に五

種を立つ、所 謂る一に讀誦、二に觀察、三に禮拜、四に稱名、五に讚歎是れなり、此中第一に於

て謗法の重罪を犯し、第三に於て國賊の證を顯はす、故に別して茲に出す、

除上禮拜彌陀已外於一切諸佛菩薩等及諸世天等禮拜 茲に於て法然天照八幡等の國神を斥ぞけ、以て

て畢命を期とする者は、十は即十ながら生じ、百は即百ながら生ず、何を以ての故に、外の雜縁無ふして正念と得るが故に、佛の本願に相應するが故に、教に違はざる故に、佛語に隨順するが故に、若し專を捨て雜業を修せんと欲する者は、百の時に希に一二を得、千の時に希に五三を得、何を以ての故に、雜縁亂動して正念を失するが故に、佛の本願と相應せざるが故に、教と相違するが故に、佛語に順せざるが故に云々、但し專にして意を作さしむる者は、十は即十ながら生じ、雜を修して心に至さざる者は千が行者能思量之。曇鸞、道緯及び善導は、聖行、難行、中に一もなし云云。攝不攝の各論あり、然りと雖も、本邦に於て法然明かに聖難雜に法華經等を加へ、以て佛意を害し謗法の根源を造る、

又云、貞元入藏錄中、唐の德宗皇帝の御宇に沙門、始自大般若經、

華嚴と書して可なり、然るに大般若經と書せしは、大乘經中の深淺に依り列舉せし者也、六百卷終于法常住經、

三十七部二千八百八十三卷也、皆須攝讀大乘之一句、法然謗法の罪科を益々重くせんとて、更に入藏目錄を出し、淨土三部に據りて念佛口唱の外、悉く讀誦大乘の一句に攝し、雜修雜行として之を斥ぞく、當

知隨他之前、佛機縁に隨從し、假りに方便を説く、之と隨他と稱し、佛已證

口唱を隨自とし、其の他、之を隨自と云ふ、但し法然は淨土經に依り念佛を隨他なりと誤解せり、

覽雖開定散門、選擇集に云く、定散と云ふは、二

には散善、初めに定善に付て十三有り、一者は想觀、二者水想觀、三者地想觀、四

者寶樹觀、五者寶池觀、六者寶樓閣觀、七者華座觀、八者像想觀、九者阿彌陀

十者觀音觀、十一者勢至觀、十二者普往生觀、十三者雜想觀、具には經に説くが如

し、縦ひ餘行無しと雖も、或は一或は多其の堪ゆる所に隨て十三觀を修して往生を

得べし、其の旨經に見へたり、敢て疑慮すること莫れ、次に散善に付て、二有り、

一者三福、二者九品、初め三福とは經に曰く、一者父母に孝養し、師長に奉事し、

慈心を以て殺さず、十善業を修す、二者三歸を受持し、象戒を具足して威儀を犯さ

ず、三者菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を觀進す、乃至次に

九品とは、前の三福を開し、隨自之後還閉定散門、一開以後永不

閉唯是念佛一門、法然の誑惑茲に至て極、又云念佛行者、必可具

足三心之文、觀無量壽經云、觀無量壽經に云く、若し衆生有りて、彼の

即便ち往生すべし、何等をか三となす、一には至誠心、二には深心、

三には廻向發願心なり、三心を具する者は必ず彼の國に生ず、同經疏

云、以下觀經の疏に於て、觀經の三心中廻向發願心を釋する中の文、問云、若有、
解行不同邪雜人等、今少しく觀經疏を續引し以て示さん、問て曰く、若

種々の疑難を説て、往生することを得ずと道ひ、或は汝等曠切已來及以ひ今生まで
身口意業、一切の凡身聖身の上に於て、具に十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等の罪
を造て、未だ能く除盡せず、然るに此等の罪は、三界惡道に繫屬す、云何ぞ一生福
を修し佛を念じ、即彼の無漏無生の國に入り、永く不退の位を證悟するを得と云ん
也、答て曰く、諸佛の教行數塵沙に越ゆ、稟識の機縁情に隨て一に非ず云々……
……(次に譬喩と以て更に答ふ、其の中に下文有り)……又一切の往生人等に
白す、今更行者の爲めに一譬喩を説き、信心を守護して以て外邪異見の難を防がん、
譬へば云々……(此の譬喩甚だ長くして悉く擧げ難し、故に略して之れを云は
ん、南北に大河流れ、其中間に一小白道有り、時に一旅人東岸の人聲を聞き此の小
道に副て西に向ひ、行く……と二分にして群賊有り、大に呼て曰く、汝行くなかれ、
其の道險惡にして過るを得ず、行けば必ず死せんと、又た西岸に一人有り、呼て曰
く來れ、決して憂ふる莫れ恐る勿れと、茲に於て旅人意を決し奔て西岸に到ると、
而して更に此の譬喩を解して、觀經疏に下文有り……東岸に人の聲の勸め遣
るを聞て、道を尋ねて直に西に進むと云は、即ち釋迦既に滅して、後人は見されど
も、なほ教法のつて尋ねべきに喩ふ、即ち之を喩ふるに聲の如し、或は行くこと一
分二分にして群賊等喚迴へすと言ふは、即ち別解別行惡見人等、妄りに見解を説て

迭相ひ惑亂し、及び自ら罪を造りて退失するに喩ふ、西岸 防外邪異見之
上に入有り喚ふと言ふは、即ち彌陀の願意に喩ふ也云々

難二或行一分二分群賊等喚迴者即喩別解別行惡見人等二
以上觀經疏以下 私云又此中言一切別解別行異學異見等者
法然の私通

是指聖道門已上。又最後結句文云、選擇集の 夫速欲離生死
二種勝法、聖道淨土の二門共に世間法 中且閣聖道門、選人淨土門、
に勝る故に勝法と云ふ、

欲入淨土門、正雜二行中、且拋諸雜行、選應歸正行已上、以上
法然の曲義を示し、就之見之、引曇鸞道綽善導之謬釋、曇道善の
以下其の非を辨ず、

た佛法の正解と得ず、然るに法然其の 建聖道淨土難行易行之旨、以
流を酌み妄に益滋す邪を加ふ、

法華眞言惣一代之大乘六百三十七部二千八百八十三
卷一切諸佛菩薩及諸世天等皆攝聖道難行雜行等或捨

或閉。或閣。或拋。捨閉閣拋の四字次上引證。以此四字多迷一切剩。

以三國之聖僧十方佛弟子等皆號群賊併令罵詈近背所

依淨土三部經唯除五逆誹謗正法誓文五逆とは、一に殺父、二

四に殺和合僧、五に出佛身血なり、無量壽經に云く、設し我れ佛を得んに、十方衆

生至心信樂して、我國に生せんと欲し、乃至十念せんに、若し生せずんば正覺をと

らず唯だ五逆と誹謗正法を除く然るに法然猥りに世尊の本懐たる正法法華遠

經を誹謗せり故に彌陀反て此徒を嫌ふ念佛門徒夫れ少しく反省せよ

迷一代五時之肝心釋尊十九歳にして出家し、三十にして成道し、寂滅道

場に於て十玄六相の理を説くこと三七日、是を華嚴經

と云ふ、是れ佛説法の最初なり、是れより阿含十二年、方等十六年、般若十四年、

以上四十二年、佛壽七十二歳の時、靈鷲山に於て法華本迹二門を説き、如來出世本

懷を述ること八年、此を法華經と云ふ、次に滿八十にして跪提河沍陀の家に於て、

一晝夜涅槃經を説き、二月十五日涅槃に入る、此れを一代五時の説相となす、

法華經第二譬喻品若人不信毀謗此經乃至其人命終入阿

鼻獄阿鼻とは梵語、爰に誠文者也於是代及末代人非聖人各

鼻獄は無間と譯す、

容冥衢忘直道悲哉不拊瞳矇痛哉徒催邪信故上自國主

下至士民皆謂經者無淨土三部之外經佛者無彌陀三尊

彌陀、觀音、之外佛仍傳教義眞慈覺智證等傳教は本邦台宗の開

勢至、

宗の碩學たり、然りと雖も慈覺智證の如きは、大に天台の教義を亂し、法燈を汚が

せし曲學者なり、蓋し宗祖此等の者を擧示し玉ふは、當時未だ本化内證を顯はさず、

養利瞰鈍の術と用ふ、深く天台の理非、眞言の邪正を論せず、故に若し讀者宗祖の

教壇に於て深く咀嚼せんと欲せば、佐渡謫流後の妙判を窺へ、必ず天台の濁亂を知

り、眞言の邪義を悟り、大化或涉萬里之波濤延曆二十三年傳教詔を奉

の大法を知るし足らむ、而所渡聖教或廻一朝之山川承和五年慈覺入唐し、智證義眞に従

て出家し、仁壽三年唐に入る、而所崇之佛像若高山之巔建華界寺院の

潤に地藏を安じ、戒心谷に虚空藏を安し、故國主寄郡鄉以明燈燭地
 是等皆な嘗て衆生に利益を被らしむ、故國主寄郡鄉以明燈燭地
 頭充田園以備供養而依法然之撰擇則忘教主而貴西土
 之佛陀抛付屬而閣東方之如來唯專四卷三部之經典空
 抛一代五時之妙典是以非彌陀之堂皆止供佛之志非念
 佛之者早忘施僧之懷故佛閣零落瓦松之煙空老僧房荒
 廢庭草之露屢深雖然各捨護惜之心並廢建立之思是以
 住持聖僧行而不歸守護善神去而無來是偏依法然之撰
 擇也悲哉數十年間百千萬之人被蕩魔緣多迷佛教好謗
 忘正善神不成怒哉捨圓好偏圓滿の大乗妙典を捨て、半偏なる權教を好む、惡鬼不
 得便哉不如修彼萬祈禁此一凶矣初問に列記せる祈禱の驗無き、妖災の連起せる原因を明示し、

結句に於て判決し、以て
 本論所破の大綱を提ぐ、

客殊作色曰法然を勝法の輩と云ふと疑ひ、其の徳を歎じ大に憤る、我本師釋迦文說淨土

三部經以來曇鸞法師捨四論講說四論とは中論、百論、十二一

向歸淨土道綽禪師閣涅槃廣業偏弘西方行業道綽涅槃經四

捨て淨土專念捨て、淨土專念の業に改む、善導和尚抛雜行立專修惠心僧都集諸經之

要文崇念佛之一行專心は天台の座主にして、永觀二年甲申冬十一月往生

有余年を経て、寛弘丙午冬十月の比前非を悔ひ一乗要決を著し、以て捨邪歸正す、其序に曰く、諸乘權實は古來の諍ひ也、俱に經論に據り互に是非を執す、余寛弘丙

午歲冬十月、病中嘆じて曰く、佛法に遇ふと雖も佛意を了せず、若し終に手を空しくして後悔何ぞ追ん、爰に經論の義、賢哲の章疏、或は人をして尋ねしめ、或は自

ら思擇し、全く自宗他宗の偏黨を捨て、専ら權智實智の深奥を探り、終に一乘眞實五乘方便の説を得る者也、既に今生の矇を開く、何ぞ夕死の恨を遺さん、貴

重彌陀誠以然矣又往生之人其幾哉就中法然聖人幼少

而昇天台山十七而涉六十卷

天台大師法華に由て三部を講説す、所謂る、玄義十卷文句十卷止観十卷是なり、後ら荆溪妙樂次第の如く、釋籤疏記輔行各十卷を造り、彼の三部を釋す、故に合して六十卷なり

並究八宗南部六宗及天台山真言

宗、具得大意其外一切經論七遍反覆章疏傳記莫不究

看智齊日月德越先師雖然猶迷出離之趣不辨涅槃之旨

故偏覲悉鑑深思遠慮遂拋諸經專修念佛其上蒙一夢之

靈應法然或夜夢ひ、大山有り極て高し、南北に長くして西に向ひ、麓に一大河有りて河原邊際なし、林樹茂々數を知らず、山腹に登り西を見れば、空中に紫

雲聚り且つ法然の處に至る、時に雲中より無量光明を出し、又た孔雀等の百寶色の鳥類飛翔して光と放つ、漸くにして鳥雲中に隠ると見るや、腰下金色にして腰上

黒衣の一僧然編として來る、法然覺へず合掌して誰何す、僧答て曰く、我れは善導なり汝念佛の弘通讚歎するに堪へたり、故に來ると、法然之を聞き感涙に咽ぶと

見て、善覺弘四裔方之親疎故或號勢至之化身或仰善導

之再誕然則十方貴賤低頭一朝男女運步爾來春秋推移

星霜相積而恭疎釋尊之教悉譏彌陀之文何以近年之災

課聖代之時強毀先師更罵聖人吹毛求疵剪皮出血自昔

至今如此惡言未聞可惶可慎罪業至重科條爭遁對座猶

以有恐携杖而則欲歸矣念佛者の妄執 憐むべし

主人笑止曰重ねて選擇集の非を述べて、謗法の所以を證し、併せて亡國の先例及び現證を出す習辛蓼葉忘

臭溷廁虻虫は辛に住して辛と知らず、廁虫は臭氣を忘れて糞を好む、三教指歸に云く、無福の徒は、貴賤と論せず、辛臭を知らず、常に溷濁に沈みて、

已に醍醐を忘る云々聞善言而思惡言指謗者而謂聖人疑正師而擬

惡侶其迷誠深其罪不淺聞事起委談其趣釋尊說法之內

一代五時之間立先後先とは法華以前の經經、後とは法華涅槃辨權實爾前四十二年の權教

法華八年の實教而曇鸞道綽善導就權忘實依先捨後未探佛教淵

底者就中法然雖酌其流不知其源曇鸞の難易二道、道綽の聖淨二門、傳道の正雜二行は、必ずしも法華を論せず、然るに法然其等の義を曲會し、惡口一段を加ふ所以者何以大乘經六百三十七

部二千八百八十三卷并一切諸佛菩薩及諸天等置捨閉

閣拋之四字蕩一切衆生之心是偏展私曲之詞全不見佛

經之說妄語之至惡口科言而無比責而有餘人皆信其妄

語悉貴彼選擇故崇淨土之三經而拋衆經仰極樂之一佛

阿彌陀佛而忘諸佛誠是諸佛諸經之怨敵聖僧衆人之讎敵

也此邪教廣弘八荒周遍十方抑以近年之災難課往代之

由強恐之聊引先例可悟汝迷止觀第二引史記云周末有

被髮袒身此れ夷狄の俗にして中國の風に非ず不依禮度者弘決第二釋此文

引左傳曰初平王之東遷也伊川見被髮者而於野祭識者

曰不及百年其禮先亡周の幽王大戎の爲めに滅ばされ、平王嗣て立ち東洛邑に遷る、其後赧王五十九年に至て秦の昭王周

と攻亡ぼし、寶器九鼎を収ひ、是れ法然所立の哀音念佛、既に亡國の前非たるに例す爰知徵前顯災後致又阮

籍世に傳ふ竹林七賢の一人にして、志氣宏壯傲然獨得の晋人也逸才蓬頭散帶後公卿子孫皆

數之奴苟奴苟とは賤者と云ふ相辱者方達禮義ありて戒慎する者自然樽節兢持者

呼爲田舍是爲司馬氏晋司馬を姓とす滅相已上又案慈覺大師入

唐巡禮記云唐武宗皇帝會昌元年敕令章敬寺鏡霜法師

於諸寺傳彌陀念佛教每寺三日巡輪不絕同二年廻鶻國

之軍兵等侵唐堺同三年河北之節度使忽起亂其後大蕃

國更拒命廻鶻國重奪地凡兵亂同秦項之代秦末に於て楚の項羽、漢の高祖と天

下を争ひ合戦算無なし、故に生命財産を亡ふ者勝て敷ふべからず、然るに會昌年間争乱連起し恰も其時に同すと成り、**災火起、邑里之**

際、何況武宗大破佛法多滅寺塔、會昌五年道士趙歸真釋氏と辨論せん

會せしむ、沙門智玄辨論精壯毫も屈するなし、故に帝快からず、遂に詔と下し佛寺四

万餘區を廢毀し、僧尼を還俗すること二十六万、寺院を解て官廩を造り、鐘聲を銷

して農器を鑄る、**不能撥乱遂以有事已上取意**、武帝即位中干戈止むなく、

順憲旬日語らず、**以此惟之法然者後烏羽院御宇建仁年中之**

者彼院御事既在眼前、承久三年七月義時、後鳥羽上皇を隱岐に、土御門

久の大乱也、**然則大唐殘例吾朝顯證汝莫疑汝莫恠唯須捨凶歸**

善塞源截根矣、念佛の一凶を捨て妙法の良善に歸る、淨土

客聊和曰、勸狀の進否を糺し、且**未究淵底數知其趣但自花落**

京都、至柳營、鎌倉、釋門在樞樞佛家在棟梁然未進勸狀不

及上奏汝以賤身輒吐莠言、京都鎌倉の名僧知識未だ天下と諫めず、

と、實に宗祖、松葉谷の庵室に單獨勇猛、諸宗の**其義有餘其理無謂**、

非義を駁せし當初、社會の冷罵斯く有りし也、**主人曰**、佛説に據りて謗法呵責の理を明

予雖爲少量忝學大乘蒼蠅**附驥尾而渡萬里碧羅懸松頭而延千尋**、法華の行者凡身たりども、

諸宗の邪正を定め權實起盡を判す、**生一佛之子**、法華經に云く、今此の三界は皆是れ我が有

事諸經之王、法華經に云く、諸經中の王**何見佛法之衰微不起心**

情之哀惜其上涅槃經云、**若善比丘見壞法者置不呵**

責駭遣舉處當知是人佛法中怨若能駭遣呵責舉處是我

弟子哀聲聞也其上去元仁中自延曆興福兩寺度々經奏

聞申下敕宣御教書、延曆興福等の奏狀、並に念佛禁止の宣旨、一にして足

を出せば、本論第五問答中主言に於て、又案慈覺大師入唐巡禮記より、遂以有事でを擧げ續みて下文有り……是れ則ち恣に淨土の一門を信じ、護國の諸教を仰がざるに依てなり、而るに吾朝一向専修を弘通してより以來た、國衰微に屬し、俗多く艱難す、(已上)又云く、音の哀樂を以て國の盛衰を知る、詩の序に云く、治世の音は安以て樂む其政和し、亂世の音は怨以て怒る其政乖く、亡國の音は哀以て思ふ其民困む云云、近代念佛の曲と聞くに、理世撫民の音に背むき、己でに哀慟の響を成す、是れ亡國の音たる可し矣、法然之選擇、印板取上、大講堂、爲報三世佛之恩、令燒失之、嘉祿年間之於法然墓所、仰付感神院、大神人、令破却、法然の墓は東山大谷に在り、感神院は即ち祇園山門の末寺にして、大神人は常に香及び管弦を作り祭禮に神輿を昇き以て職とす、而して此等の人に依りて嘉祿三年法然の墓を發さ、其墓を戮し鴨河に流す、其門弟隆觀、聖光、成覺、薩生等、配流遠國、其後未許御勸氣、豈未進勸狀云也。

客則曰、災難の治術下經、謗僧一人難論、法然果して諸經と下し、必ず衆僧を誹謗せしや、

一個人の問答に於て、然而以大乘經六百三十七部二千八百八

十三卷并一切諸佛菩薩及諸世天等載捨閉閣拋四字、其詞勿論也、其文顯然也、守此、瑕瑾成其誹謗、迷而言歟、覺而語歟、賢愚不辨、是非難定、法然捨閉閣拋の四字を以て、諸大乘經并に諸佛を貶すと雖も、唯に此の一事を以て法然を誹謗す、是れ是非乎遽に辨じ難し、此れ即ち客の未承伏を顯す、但災難之起因、選擇之由、盛增其詞、彌談其旨、客未だ疑議すと雖も、災害の起因選擇集に由ること粗々知る者の如し、所詮天下泰平國土安穩、君臣所樂、士民所思也、夫國依法而昌、法因人而貴、國亡人滅、佛誰可崇、法誰可信哉、先祈國家須立佛法、宗祖國教の關係を觀察し玉ふこと夫れ斯の如し、讀者克く餐稟せよ、若消災止難、有術欲聞、

主人曰、涅槃經等を引き、以て謗人を治罰すべき證を示す、余是頑愚、敢不存賢、唯就經文、聊述所存、抑治術之旨、内外佛教を内典と稱し、其他を外典と云ふ、之間、其幾多具

難可舉。但入佛道。數廻愚案。禁謗法之人。重正道之侶。國中安穩。天下泰平。即涅槃經云。南本會疏第十佛言。唯除一人。餘一切施皆可讚歎。純陀問言。云何名爲唯除一人。佛言。如此經中所說。破戒。純陀復言。我今未解。唯願說之。佛語。純陀言。破戒者。謂一闍提。其餘在所。一切布施皆可讚歎。獲大果報。純陀復問。一闍提者。其義云何。佛言。純陀。若有比丘及比丘尼。優婆塞。優婆夷。發惡言。誹謗正法。造是重業。業とは罪也永不改悔。心無懺悔。如是等人名爲趣向一闍提道。若犯四重。殺生、邪淫、妄語、の四大罪作五逆罪。自知定犯。如是重事。而心初無怖畏。懺悔不肯發露。於彼正法。永無護惜。建立之心。毀訾輕賤。言多

過咎。如是等人。亦名趣向一闍提道。唯除如此。一闍提輩。施其餘者。一切讚歎。又云。南本會疏第十一我念往昔。於閻浮提。作大國王。名曰仙豫。愛念敬重大乘經典。其心純善。無有羸惡。嫉恚善男子。我於爾時。心重大乘。聞婆羅門。誹謗方等。大乘の實理云ふなり聞已。即時斷其命根。勝法波羅門の生命を奪ふ善男子。以是因緣。從是已來。不墮地獄。宗祖曰く、禪宗念佛宗等の法師原の頸を切り、鎌倉由比ヶ濱に捨てずんば國當に亡ぶべし又云。南本會疏第十五如來昔爲國王。行菩薩道時。斷絕爾所。婆羅門命。又云。殺有三。謂下中上。下。蟻子。乃至一切畜生。唯除菩薩。示現生者。衆生を教化せんが爲め、此土に應現したる菩薩なり以下殺。因緣墮於地獄。畜生餓鬼。具受下苦。何以故。是諸畜生。有微善根。是故殺者。具受罪報。中殺

者從凡夫人至阿那含小乘教の覺位なり是名爲中以是業因

墮於地獄畜生餓鬼具受中苦上殺者父母乃至阿羅漢辟

支佛畢定菩薩阿羅漢は聲聞にして、佛の說法を聞て得道し、辟支佛とは緣覺にして、飛花落葉等を見て世の無常と悟り、畢定菩薩は、

修行の功積みて必ず佛果に至り、決して下界に退かざる眞位の菩薩なり、墮於阿鼻大地獄中善男子若

有能殺一闍提者則不墮此三種殺中善男子彼諸婆羅門

等一切皆是一闍提也已上仁王經云受持佛告波斯匿王

是故付屬諸國王不付屬比丘比丘尼何以故無王威力是

王法を用ひ正法を弘通すべきを顯はす、涅槃經云長壽今以無上正法付屬諸王

大臣宰相及四部衆毀正法者大臣四部之衆應當苦治誹

正法の人を退治すべきを示す、又云金剛身佛言迦葉以能護持正法因緣故

得成就是金剛身善男子護持正法者不受五戒不殺生戒、不

盜戒、不妄語戒、不飲酒戒、不修威儀應持刀劍弓箭鉞槩大乘行者の用心を示す、又

云全上若有受持五戒者不得名爲大乘人也不受五戒爲

護正法乃名大乘護正法者應當執持刀劍器械雖持刀杖

我說是等名曰持戒是れ正法法師を侍衛すべきを示す、又云善男子過去之世

於此拘尸那城釋尊唱滅の處なり、有佛出世號歡喜增益如來佛涅槃

後正法住世無量億歲餘四十年佛法未滅爾時有一持

戒比丘名曰覺德爾時多有破戒比丘聞作是說皆生惡心

執持刀杖逼是法師是時國王名曰有德聞是事已爲護法

故即便往至說法者所與是破戒諸惡比丘極共戰鬪爾時

說法者得免厄害。王於爾時身被刀劍箭槩之瘡。體無完處。如芥子許。爾時覺德尋讚王言。善哉善哉。王今真是護正法者。當來之世。此身當為無量法器。王於是時得聞法。已心大歡喜。尋即命終。生阿閼佛國。而為彼佛作第一弟子。其王將從。人民眷屬有戰鬪者。有歡喜者。一切不退菩提之心。命終。悉生阿閼佛國。覺德北丘却後壽終。亦得往生阿閼佛國。而為彼佛作聲聞眾中第二弟子。若有正法欲滅盡時。應當如是受持擁護。迦葉爾時王者則我身是。說法比丘迦葉佛是。迦葉護正法者得如是等無量果報。以是因緣。我於今日得種種相。三十二相八十種光。以自莊嚴成就法身不可壞身。佛に三種に有三種の佛莊嚴を云ふ。

り所謂る法身 佛告。迦葉菩薩。是故護法優婆塞等。應執持刀杖。擁護如是善男子。我涅槃後。濁惡之世。國土荒亂。互相抄掠。人民飢餓。爾時多有為飢餓故。發心出家。如是之人名為禿人。身に法衣を著すとも、護法心なき僧を云ふ。今時は等の禿人有りや無しや。 是禿人輩見護持正法。驅逐令出。若殺若害。是故我今聽持戒人依諸白衣持刀杖者。以為伴侶。雖持刀杖。我說是等名曰持戒。雖持刀杖。不應斷命。佛過去の因縁を説き、正法行者と護衛すべきを勸む。 法華經云。譬喻。若人不信毀謗此經。即斷一切世間佛種。乃至其人命終入阿鼻獄。已上經文。夫經文顯然。私詞何加。凡如法華經者。謗大乘經典者。勝無量五逆。故墮阿鼻大城。永無出期。如涅槃經者。許五逆之供不

許、謗法之施。五逆謗法の兩罪を比較し、以て謗法の重罪と明す、夫れ設ひ五逆罪人の布施を受くと雖も、謗法者の布施を受くべからず、又

た五逆罪人を供養すとも、謗法者に供養すべからず、殺、蟻子者必落三惡道。禁謗法者定登

不退位。佛果、所謂覺德者是迦葉佛。有德者則釋迦文也。法

華涅槃之經教者一代五時之肝心也。其禁實重。誰不歸仰

哉。而謗法之族忘正道之人。元來諸宗の僧俗權實起盡に迷ひ、正道並に正師を忘る悲哉、剩依

法然之選擇。彌增愚癡之盲瞽。是以或忍彼遺體而露木畫

之像。法然を慕ひて或は木に彫し、或は繪に畫し、以て尊崇するを謂ふ、或信其妄說而彫、莠言之模。

選擇集等を上梓せしを云ふ、弘之海內。翫之鄩外。所仰則其家風。所施則其

門弟。然間或切釋迦之手指。結彌陀之印相。親指と人指指を合し、輪形を作り、他の三指を開く、是れ釋迦の印相なり、然るに人多く彌陀を信ずる故に、釋迦の印を改めて彌陀

の印を造るなり、或改東方如來之鴈宇。寺院の異稱、居西土教主之鵝王。

佛陀の異稱、或止四百餘廻。四百餘年と云ふ如し、之如法經。元享釋書に曰く、圓仁石墨草筆を以て妙法華を書し、且つ四種三昧を修す、書す所の經を以て、小塔に藏し、一卷を置き、如法堂と名づく、故に天下之に則どり、法華を書して如法經と號す云云、成西

方淨土之三部經。或停天台大師講。爲善導講。如此群類。其

誠難盡。是非破佛哉。是非破法哉。是非破僧哉。第三問に於て三實の跡を廢せりと謂はん哉、の客疑に應照し三寶の破壊と示す、此邪義則依選擇也。嗟呼悲哉。背如來

誠諦之禁言。哀矣。隨愚侶迷惑之麤語。早恩天下之靜謐者。

須斷國中之謗法矣。

客曰。謗法者と禁せば、殺罪を犯すべき義を疑ふ、若斷謗法之輩。若絕佛禁之違者。如

彼緩文。涅槃經と指す、可行斬罪。歟。若然者。殺害相加。罪業何爲哉。

則大集經云大集月藏經 法藏盡品頭刺著袈裟持戒及毀戒天人可供

養彼則為供養我是我子若有槌打彼則為打我子若罵辱

彼則為毀辱我料知不論善惡無擇是非於為僧侶可展供

養何打辱其子僧忝悲哀其父釋尊彼竹杖之害目蓮尊

者或時竹杖外道佛弟子 一日蓮を害す永沈無間之底提婆達多之殺蓮華比丘

尼久咽阿鼻之焰先證斯明後昆最恐似誠謗法既破禁言

大集經の 禁誡此事難信如何得意

主人曰涅槃大集兩經の意を會通客明見經文涅槃經 猶成斯言心

之不及歟理之不通歟全非禁佛子唯偏惡謗法也大集經の 可供養彼

の彼は、謗法なき佛弟子を謂ふ也、若し一たびも法を謗れば則ち佛子にあらず、是れ自然の理なり、然れば佛何ぞ謗法を供養せと言んや、故に知ぬ、大集經の意は謗

法なき、持戒毀戒の佛弟子を指す事と、涅槃經は之に反し、全く謗法者の罪と正し、其の處斷を擧ぐ、夫釋迦之以前佛教

者雖斬其罪能仁之以後說則止其施仙像有徳の緣は釋尊過去の 說に風す、故に以前と云ひ、

佛純陀に對して一闍提の施を禁せしは、是れ滅後の指南たり、故に以後と云ふ、然則四海萬邦一切四衆不施

其惡歸此善何難並起何災競來矣

客則避席刷襟曰客信伏して主人を崇敬し、 以て斷疑生信を顯はす、佛教區旨趣難窮不

審多端理非不明但法然聖人選擇現在也以諸佛諸經諸

菩薩諸天等載捨閉閣拋其文顯然也因茲聖人去國善神

捨所天下飢渴世上疫病今主人廣引經文明示理非故妄

執既翻耳目數朗所詮國土泰平天下安穩自一人至萬民

所好也所樂也早止一闍提之施謗法邪師の布 施を禁止す、致衆僧尼供正法

正師を供養す、取佛海之白浪、截法山之綠林、世成義、伏義、農神農、

之世、國爲唐堯、虞舜、之國、謗法絶滅して天下始め、無事泰平ならむ、然後斟酌法

水之淺深、崇重佛家之棟梁矣、先づ謗法の根本念佛を滅し次に經の淺深を糾明し以て正法正師を崇重せむ、

主人悦曰、客の捨邪歸正を歎じ、尙ほ後の退轉を恐れ更に懇懇勸信す、鳩化爲鷹、雀變爲蛤、悅哉

汝交蘭室之友、成麻畝之性、大論に云く、曲草に麻中に生じ、扶けずし

正せしむ誠願其難專信、此言風和浪靜、不日豐年耳、但人心

者隨時而移、物性者依境而改、譬猶水中之月、動波陳前之

軍靡、劍汝當座、雖信後定、永忘若欲先安、國土而祈現當者

速廻情慮、急加對治、邪法對治所以者何、藥師經七難、內五難、忽

起、二難猶殘、所以他國侵逼難、外寇、自界叛逆難也、內亂、大

集經、三災早顯、一災未起、所以兵革災也、金光明經、內種々

災過一一雖起、他方怨賊侵掠、國內此災未露、此難未來、仁

王經、七難、內六難今盛、一難未現、所謂四方賊來、侵國難也、

加之國土、亂時先鬼神亂、鬼神亂故、萬民亂、今就此文具案、

事情、百鬼早亂、萬民多亡、先難是明、後災何疑、宗祖既に經典に依り外寇を豫知

し、茲に明示し玉ふ、嗚呼眞に聖なる哉、讀者宜しく御勘由來併奥書に由り、其符合を窺ひ、三世了達の金言を守るべし、若所殘之難、依

惡法科、並起競來者、其時何爲哉、帝王者基國家、而治天下、

人臣者領田園、而保世上、而他方賊來、而侵逼其國、自界叛

逆、而掠領其地、豈不驚哉、豈不駭哉、失國滅家、何所遁世、汝

須思、一身安堵者、先禱四表之靜謐者歟、宗祖憂國の誠衷、句々に顯る、就中

人之在世各恐後生是以或信邪教或貴謗法各雖惡迷是非而猶哀歸佛法何同以信心之力妄宗邪義之詞哉若執心不翻亦曲意猶存早辭有爲現世之鄉必墮無間之獄邪教の妄執に覆はれ正道に入り難き者を誡ひ所以者何大集經云重出して重誠す若有國王於無量世修施戒慧見我法滅捨不擁護如是所種無量善根悉皆滅失乃至其王不久當遇重病壽終之後生大地獄中如王夫人太子大臣城主村師郡主宰官亦復如是仁王經云囑累人壞佛教無復孝子六親父子兄弟夫婦不和天神不祐疾疫惡鬼日來侵害灾恠首尾連禍縱橫死入地獄餓鬼畜生若出爲人兵奴果報如響如影如人夜書火滅字存三界果

報亦復如是法華經第二云若人不信毀謗此經乃至其人命終入阿鼻獄又同第七卷不輕品云千劫於阿鼻地獄受大苦惱涅槃經云會疏三十二遠離善友不聞正法住惡法者是因緣故沈沒在於阿鼻地獄所受身形縱橫八万四千廣披衆經專重謗法悲哉皆出正法之門深入邪法之獄愚矣各懸惡教之綱而鎮纏謗教之綱此朦霧之迷沈彼盛焰之底豈不愁哉豈不苦哉汝早改信仰之寸心速歸實乘之一善實大乘佛法華修行之唯一大善然則三界皆佛國也佛國其衰哉十方悉寶土也寶土何壞哉國無衰微土無破壞身是安全心是禪定本の主眼全く茲に存す讀者謹て肝銘せよ法華經に云く我が此土は安穩にして天人常に充滿せり又云く我が淨土は毀れずと觀心本尊抄に曰く今本時の娑婆世界

は、三災を離れ四劫と出たる、常住の淨土なり云云

客曰歸伏誓約。今生後生誰不慎。誰不恐。披此經文法華經涅槃經等を指す。具承佛語。誹謗之科至重。毀法之罪誠深。我信一佛阿彌陀佛。拋諸佛釋迦多寶並に十方の諸佛。仰三部經閣諸經。是非私曲之意。則隨先達法然之詞。十方諸人亦復如是。今世者勞性心。來世墮阿鼻。文明理詳。不可疑。彌仰貴公之慈誨。益開愚客之癡心。速廻對治。早致泰平。先安生前。更扶沒後。非唯我信。又誠他誤耳。

日蓮勸之

文應元年(太歲庚申)七月

立正安國論集註終

立正安國論與書

本與書は、文永六己巳十二月八日、御歳四十八歳の時、安國論奏呈を去る。後十年にして、蒙古國の牒狀二回來り、既に他國侵逼難の預言將に契當す。故に御所藏安國論の卷末に、之を記し以て後代に遺し玉ふ。

去正嘉元年(太才丁巳)八月二十三日戊亥、尅大地震勸之。其後文應元年(太才庚申)七月十六日付於宿屋禪門奉_上。故最明寺殿。其後文永元年(太才甲子)七月五日大明星之時。彌知此災根源。自文應元年(太才庚申)至文永五年(太才戊辰)後正月十八日。經九箇年。自西方大蒙古國可襲我國之由。牒狀渡之。蒙古主忽必烈、高麗に因て通好を求む、高麗王植副書して我に奉る、惟るに古へより小國の君、境土相接する尙信を講し睦を修むるを務む、況んや我が祖宗天の明命を受けて、奄く區夏を有つ、遐方異域威に畏れ徳に懐く者、

悉く敷ふべからず、日本開國以來時に中國に通ず、朕が躬に至て、而も一乗の使の以て和好を通ずるなし、特に使を遣はし書を持せしめ、朕が心を布告せしむ、冀くは今より後問と通じ好を結び、以て相ひ親睦せむ、以て兵を用ゆるに至ては、夫れ孰か好む所ならむ、王其れ之を圖れ、又同六年重

牒狀渡之、蒙古使兵部侍郎黑的、禮部侍郎設弘、書を奉じ來り答書と求む、其の牒狀に曰く、大蒙古國皇帝書を日本國王に奉る、朕惟るに古より

小國の君、境土相接し尙信を講じ睦を修するを務む、況んや我が祖宗天の明命を受けて、奄く區夏を有つ、遐方異域威に畏れ徳に懷、者悉く敷ふべからず、朕即位の初め、高麗無辜の民久しく鋒鏑に瘁るを以て、即ち兵を罷め其の疆域を還し、其の旄倪を反さしむ、高麗の君臣感載して來朝す、義は君臣と雖も歎ふこと父子の若し、

計るに王の君臣亦己に之を知らむ、高麗は朕の東藩なり、日本高麗に密邇し、開國以來亦た時に中國に通ず、朕が躬に至て一乗の使の以て和好と通ずるなし、尙恐くは王國之を知らむや、未審し、故に特に使を遣はし書を持せしめ、朕が志を布告せしむ、冀くは今より以て往問を通じ好を結び以て相ひ親睦せむことを且つ聖人は四海を以て家となす、好と相通せざるは豈に一家の理ならむや、以て

兵を用ゆるに至ては、夫れ孰か好む所ならむ、王其れ之を圖れ、既勘文安國論を指す、叶之準之思之未來亦可然歟此書有徵文也是偏非日蓮之力法華經眞文所至感應歟連々不絶合戰既海外

二夷起之此書宛如符契一人以驚耳目以之案之禪宗與念佛宗等謗法之義無疑者歟

(終)

金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
 二二二五二五五二二壹三六二五五二二二二二二二二
 拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾
 錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

全全長全全市全全市全全市全全全全市全全全全全全全全
 柄郡大澤 原郡奈良 原郡東國吉 原郡高倉 原郡板倉

三

長長早奈石小東西西高石板古石石石杉杉宮三三松內內根
 谷谷川川良井池吉郡郡倉倉山井井井田田澤枝枝崎山山本
 太源與志庄辨有嘉榮志左衛志卯直美文捨石源惣市由藤四物
 之吉介市者作碩者平廉者門者吉郎郎藏郎郎藏郎郎平郎郎吉郎

金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
 二二二二二貳三三三三三三三三三三三三四四四五五
 拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾
 錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全

二

加加加林林石杉杉森三九松丸鎗鎗內成金岩三林石杉杉森
 藤藤藤 井田田 枝 崎 田田山嶋坂梨枝 井田田
 吉峰善兵角兵常榮茂市作梅八龜幸與榮庄久辰甚甚為波彌
 平吉七藏藏吉郎藏平郎郎吉郎郎八吉郎郎藏郎七藏郎吉

金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金金
 二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二
 拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾
 錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全
 山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山
 邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊
 上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上
 長長長長長長長長長長長長長長長長長長長長
 柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄柄
 味味味味味味味味味味味味味味味味味味味味
 庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄庄

江鶴片石石石馬河石前池岡北北北北高高高金金金金渡
 澤岡井井井井場野原田澤部田田田田石石石坂坂坂坂邊
 仁左重仁吉健し文與菊常嘉善周善音市右孫初幸石豐善
 惣小左重仁吉健し文與菊常嘉善周善音市右孫初幸石豐善
 平郎門藏造朗兒げ藏市松藏郎郎藏郎郎藏郎郎門郎郎造藏吉藏

金金金金金金金金金金金金金金金金
 六二二二二二二二二二二二二二二二二二
 拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾拾
 錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

(已上)

淨財勸募者

上全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全
 上總國長柄郡上長柄村
 上總國市原郡市東村

全全山山山全全全山全
 邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊邊
 大木戶

五

岡石石石宮根森森林
 部井井井澤本
 常直美文兵多璉太九左衛門
 藏郎郎藏藏吉平平門

大江萱石橫大片門加野
 樵野塚田戶岡倉藤崎
 有清左煤榮有善彦榮與
 志勘衛三郎助者六司藏治
 者作門郎助者六司藏治

四

